

甲信地区現代俳句協会会報
No. 100

第二十五回紙上句会結果発表

秋尾 敏選

(敬称略・順不同)

特選

檸檬手に紡錘形のふと不安 酒井和子

入選

木苺や我人生のごつごつと 比田井喜美子

三伏や生者のためのレクイエム 高橋佳世子

佳作

種袋花のつぶやき聞こえたり 齋藤文十郎

諏訪盆地暮色の芯にヨットの帆 根橋久子

風呂敷にみんな包みて生身魂 長崎玲子

水盗むことまで教へねばならず 国見敏子

星走る真夜白魚の生まれけり 齋藤文十郎

海底に降り積む雪や八月来 岩井かりん

父と子の密なる時や兜虫 荒井民子

松本ぼんぼん遅れてもついて行く 長崎玲子

みそかごと来世へからすうりの花 高橋佳世子
死は一瞬その後の長きこの夏は 柳澤和子

【選評】

特選句、レモンの手触りをきっかけにして、連想が不安の方向に展開していくというのだが、その内面のプロセスが、「紡錘形のふと不安」と頭韻で畳みかけてくる韻律と連動して共感できた。兵器とまで特定して読む必要はなからうと思う。

入選の「木苺」の句は、およそ俳句では成功しない「人生」などという言葉をうまく消化してて感服。「三伏」の句は特選と思っただが「生者のためのレクイエム」という曲が実際にあるので、入選に止めた。

佳作「松本ぼんぼん」の句は入選にしたかった。「種袋」の句は発想がよいが、下五はもっとやれる。「ヨット」、「白魚」の句は手

当地区協会本年度の事業計画にあり
ました第二十九回吟行会は、新型コ
ロナウイルスの感染状況を踏まえ中
止することにいたしました。何とぞ
ご了承くださいますようお願いいた
します。

堅い。「生身魂」、「水盗む」の滑稽味は捨て
がたい。「八月来」は、事象と季語との関わ
りが深い。「兜虫」からすうりの花」には類
句がありそうだが、「時や」「来世へ」あたり
に独自性があると考えて採った。末尾の句に
は共感する状況の人が多いだろう。

大井恒行選

特選

露の世に絶えぬ戦や天の川 荻上憲治

入選

蜘蛛の囀の月を捕へて光りだす 西村はる美

檸檬手に紡錘形のふと不安 酒井和子

佳作

夕星や天地返しの際涼し 黒沢孝子

雲が雲高く押し上ぐ炎暑かな 島田洋子

梅干して山家に人の気配なし 柳澤和子

星走る真夜白魚の生まれけり 齋藤文十郎

法師蟬ぐるりと畑を電気柵 比田井喜美子

星雲に淵あり古代蓮ひらく 仲 寒蟬

八月の裸婦画の声や無言館 竹野入美奈子
物置に伏せあるギター秋の虹 吉池史江
みそかごと来世へからすうりの花 高橋佳世子
それぞれの音読ルビー婚の夏 上村敦子

【選評】

特選句の上五「露の世に」には、一茶が、満一歳余りで亡くなった長女を詠んだ句と言われている（露の世は露の世ながらさりながら）を踏まえていると読んだ。加えて現在、世界中に絶えない戦争で命を失う悲哀への思いが及ぶだろう。しかも、天の川。無数の魂のように星が瞬いているではないか。無常は一人というべきだろう。

入選句の「蜘蛛の囿」の光りのその源が月光であるというのも頷ける。また、「檸檬手に」は、梶井基次郎の『檸檬』を思わせて、その不吉な塊りである紡錘形の爆弾、そこにふとした不安。この句では、それほど深刻ではない、ちょっとした不安感を適度に表現している。いずれにせよ、佳作に推した他の句についても、それほど大きな差があるわけではない。作者の表現意志がよく表されている作品ばかりだった。

神野紗希選

特選

木曾馬の母情は篤し独活の花 大野今朝子

入選

宴たけなはではございますが二重虹 仲 寒蟬
星雲に淵あり古代蓮ひらく 仲 寒蟬
佳作

夕星や天地返しの葉涼し 黒沢孝子
天平の雁の矢羽や避暑期来る 五味真穂
標本の鮫の顎骨土用干 篠遠良子
昼の闇銀竜草は実を生せる 五味真穂
後鳥羽院遠忌や隠岐の草蚩 中澤康人
山蟻がいま松脂に溺れをり 大野今朝子
山百合の斑点赤し小雨くる 宮坂秋湖
「ああい風」のこして逝きぬ蚩の夜 松下勝昭
檸檬手に紡錘形のふと不安 酒井和子
死は一瞬その後の長きこの夏は 柳澤和子

【選評】

言葉の密度、意外性の含有量、現実再現力、詩的飛躍力などに着目しながら選句した。特選（木曾馬の母情は篤し独活の花）は、たしかに現実の手ざわりと揺るぎない言葉の練り方により、ずっしりとした質量を感じさせる作品。木曾馬のどっしりとした安定感が、中七の愛のゆたかさを納得させる。独活の花の具体性もあいまって、風土の重量が十七音に立ちあがる。

入選（宴たけなはではございますが二重虹）は、意外な季語に接続させることで、上五中七の常套句をあざやかに生かし直した。宴の途中で虹を知らせてくれるアナウンス、なんと粋なのだろう。たっぶりの遊び心に

「俳」を感じる。

同じく入選（星雲に淵あり古代蓮ひらく）は「星雲」と「古代」のはるかな時空がひらく言葉の拡大力に惹かれた。星雲に淵を発見する踏みこみも、そこに蓮が花ひらく瞬間性も、句に清らかな緊張感を与えている。

宮坂静生選

特選

死は一瞬その後の長きこの夏は 柳澤和子

入選

うつせみの総身の泥乾きけり 小伊藤美保子
夏炉端熊の毛皮をどさと置く 黒沢孝子
佳作

あしたには治る擦傷青蜜柑 久根美和子
鳥になる夢から目覚め梅雨明け 新村洋子
仏壇を仕舞ふ山家に合飲の花 吉池史江
風呂敷にみんな包みて生身魂 長崎玲子
水盗むことまで教へねばならず 国見敏子
神輿捲りや木曾の晩夏を真二つ 小澤準一
後鳥羽院遠忌や隠岐の草蚩 中澤康人
己が身の終焉をふと沙羅の花 新村洋子
葎切の羽搏きに音無かりけり 原田宏子
巫女舞の果てて涼しき神楽殿 篠遠良子

【選評】

とりわけ感銘した句はなかった。（見る）という一点の感性だけでも、われわれは見足

していないと思う。〈思う〉〈感じる〉という
内省へ引き込む前に、もっと他を信じて〈見
る〉ことが大事ではないか。生半可な観念は
かえって類想がともなう。俳句表現において
観念が鍛えられるのは、自己以外の外界を意
識して〈見る〉ことであろう。

特選句は、時事詠。ロシアのウクライナ侵
攻による両国の死者が報道される。この夏は
その死さえも戦争なんだからと無機質化され
る。二十一世紀後半の世相を象徴するような
重い夏であった。

城取信平選

特選

鳥になる夢から目覚め梅雨明け 新村洋子

入選

星走る真夜白魚の生まれけり 齋藤文十郎

檸檬手に紡錘形のふと不安 酒井和子

佳作

蟬ごゑの昂りひとに運不運 辰野利彦

人生の交差点にはケルン積む 西澤日出樹

酌むならば不老の酒を暑気払 宮坂 碧

さはさはと四万六千日の行事完 宮坂秋湖

叩かれてばかりの西瓜爆発す 佐藤文子

炎天を死刑執行報走る 小林貴子

山と山架く木曾谷の揚花火 窪田英治

己が身の終焉をふと沙羅の花 新村洋子

満席と断られたり天の川 鈴木臣和
百合挿頭しシユプレヒコル独り言つ 一志貴美子

【選評】

鳥になる夢から目覚め梅雨明け
作者の夢は天空を駆け巡る大きな鳥。その
夢から覚めたとき梅雨明けがはじまったとい
う映像。

星走る真夜白魚の生まれけり
流れ星の夜生まれた白魚の子。半透明の姿
は流れ星のDNAと見たのであろう。

檸檬手に紡錘形のふと不安
尖った檸檬の両端に不安を感じるの、
日常丸い型の果実に馴染んできたからでし
う。

酌むならば不老の酒を暑気払
叩かれてばかりの西瓜爆発す
両句の哀歓にほればれ。人間の存在十分。

中澤康人選

特選

風呂敷にみんな包みて生身魂 長崎玲子

入選

山頂に寝て銀漢をふりかぶり 宮坂 碧

蜘蛛の囀の月を捕へて光りだす 西村はる美

佳作

標本の鮫の顎骨土用干 篠遠良子

叩かれてばかりの西瓜爆発す 佐藤文子

空蟬やすでに己の墓標なる 萩原昭廣
水出しの茶の甘き日や稲に花 伊藤美恵
車撫ぜ免許返上涼しかり 下田幼和
雲の峰人も蟻とふ言はれし日 久根美和子
星雲に淵あり古代蓮ひらく 仲 寒蟬
己の意志確と八月十五日 関 道子
「ああい風」のこして逝きぬ螢の夜 松下勝昭
父と子の密なる時や兜虫 荒井民子

【選評】

風呂敷にみんな包みて生身魂
孟蘭盆は死者を迎える行事だが、この世に
存する生者をも尊ぶ風習は、日本古来の大切
なしきたりでもあった。特に年配者を尊びて
手厚くもてなすのは一家の繁栄の証しでもあ
った。近頃は諸事情もあって対面での交流は
少なくなつたが、盆の挨拶としてこまごまと
風呂敷に包むことは喜びの表われである。掲
句の「みんな包みて」は贈る側の喜びを精一
杯表わしている。このごろの自由主義は家族
観をつき放しているようだが、なくしてはな
らない風習である。

佐藤文子選

特選

満席と断られたり天の川 鈴木臣和

入選

穏やかな笑みをこぼして夏の月 清水恵子

右向け右向日葵天を睨むなり 伊藤みち子
佳作

生きているだけで奇跡や蛇苺 小澤 溪
心太つかみどころの無き男 古畑 和
鳥になる夢から目覚め梅雨明け 新村洋子
空梅雨や天地に畏れ抱かせり 小澤 斉子
風呂敷にみんな包みて生身魂 長崎玲子
車撫ぜ免許返上涼しかり 下田幼和
籐椅子や雨ざつと来てふつと行き 辰野利彦
水盗むことまで教へねばならず 国見敏子
遠く来てまた遠く見る苔の花 伊藤 翠
山頂に寝て銀漢をふりかぶり 宮坂 碧

【選評】

特選句。

天空の美しい天の川。どんなところか、一度は天の川に行ってみたいと思う。現実には星の集合体で白く光って見える。七夕伝説の星の逢う場所でもある。他者を入れない場所でもある。やんわりと満席と断られたという発想が秀逸。

俳句は人の言わないことを作品にする。景の発見、言葉の発見を妙味とする。

堤 保徳選

特選

扇風機に当たり続けて老けにけり 酒井和子
入選

星雲に淵あり古代蓮ひらく 仲 寒蟬
薔薇の香を吸ふて出掛ける投票所 樋上照男
佳作

反戦に無力ぞ紙魚を払ひつつ 国見敏子
磨り減りし鎌の柄秋の開拓地 窪田英治
木苺や我人生のごつごつと 比田井喜美子
諏訪盆地暮色の芯にヨットの帆 根橋久子
競り声の飛び交ふ木場や木曾晩夏 小澤 準一
夏の雲帰らぬ過去を写し出す 小澤 溪
山と山架く木曾谷の揚花火 窪田英治
空蟬の見詰むる宙や地球病む 中村和代
己の意志確と八月十五日 関 道子
己が身の終焉をふと沙羅の花 新村洋子

【選評】

特選句。夏の暑さの中、扇風機に当たり過ぎて老けてしまったという、ユーモラスな原因結果が面白い。それもエアコンではなく扇風機というところに、青春を謳歌した昭和へのノスタルジーがある。同時に、老いのペーソスも漂う。その上で、今を諾う磊落さが快い。

入選句〈星雲に淵あり古代蓮ひらく〉。星雲という神秘的なものと、時空を越えて開く生命力溢れる古代蓮との取り合わせにロマンがある。

入選句〈薔薇の香を吸ふて出掛ける投票所〉。一つの現実的な行為の前に、豊かな夢のような世界に遊ぶところに詩情がある。

中村和代選

特選

緑蔭に休める山羊の悟り顔 上村敦子

入選

百日草咲き続けるは余情なり 根橋久子
余花咲きぬ「私群れるの嫌だから」 本多独川
佳作

反戦に無力ぞ紙魚を払ひつつ 国見敏子
青桐や地球ひたすら青々と 伊藤 翠
種袋花のつぶやき聞こえたり 齋藤文十郎
殉教者の衣のごとき蟬の殻 岩井かりん
空蟬やすでに己の墓標なる 荻原昭廣
葭切の羽搏きに音無かりけり 原田宏子
八月の裸婦画の声や無言館 竹野入美奈子
不器用な蚯蚓地表に蜿きをり 荻原昭廣
道をしへ岐路にて急所見逃さず 平澤寿美枝
満席と断られたり天の川 鈴木臣和

【選評】

特選句。緑蔭に山羊の休む光景はのどかである。顎髯の顔はまるで哲学者の風情を醸し出しているとの設定が面白い。山羊を見る作者もきつと悟り顔となっている。やはり作品には作者の姿が投影される。

入選一句目。余情とはあとに残るおもむき、余韻のこと。百日草は花期の長いところからこの名がつけられたが、生物学的な観点ではなく余情によって咲き続けるという発想

に詩的感性をみた。調べもなめらかで一読するとしつかりと残る一句。

入選二句目。初夏になっても咲き残る桜の花が余花。本来の時期を避けるのは自己主張の強さ故と思わせたのが魅力的である。文語と口語のアンバランスもこの句には許されるであろう。

窪田英治選

特選

檸檬手に紡錘形のふと不安 酒井和子

入選

薔薇の香を吸ふて出掛ける投票所 樋上照男

右向け右向日葵天を睨むなり 伊藤みち子
佳作

夕星や天地返し of 葉涼し 黒沢孝子
鳥になる夢から目覚め梅雨明け 新村洋子
殉教者の衣のごとき蟬の殻 岩井かりん
水出しの茶の甘き日や稲に花 伊藤美恵
風呂敷にみんな包みて生身魂 長崎玲子
梅干して山家に人の気配なし 柳澤和子
水盗むことまで教へねばならず 国見敏子
蜘蛛の囀の月を捕へて光りだす 西村はる美
山蟻がいま松脂に溺れをり 大野今朝子
世を隔て葭切の啼く沼の縁 城取信平

【選評】

檸檬手に紡錘形のふと不安

梶井基次郎の小説「檸檬」を下敷きにした作品。檸檬の明るくて酸っぱい香りは、青春時代を生きているようなときめきがある。

が、その形は手榴弾を連想させる。梶井もそれに類した連想をしたのだろう。ロシアのウクライナ侵攻により現実の世界は、多くの人間が抱く平和な世界（檸檬）が、いかに不安定であるかを物語る。俳句が、宇宙の普遍性を詠い、同時に現在を詠う文学であることを再確認した作品。

薔薇の香を吸ふて出掛ける投票所

「投票所」は句材になりにくい、未来を信じる心根を失っていないのが良い。

島田洋子選

特選

戦争を憎し憎しとなめくじら 樋上照男

入選

星走る真夜白魚の生まれけり 齋藤文十郎

空蟬の見詰むる宙や地球病む 中村和代
佳作

反戦に無力ぞ紙魚を払ひつつ 国見敏子
あしたには治る擦傷青蜜柑 久根美和子
夕星や天地返し of 葉涼し 黒沢孝子
熱風を一太刀にする女子剣士 中村和代
標本の鮫の顎骨土用干 篠遠良子
心太作為なきまま押し出され 伊藤みち子

仏壇を仕舞ふ山家に合歓の花 吉池史江
夏炉端熊の毛皮をどさと置く 黒沢孝子
後鳥羽院遠忌や隠岐の草蚩 中澤康人
父と子の密なる時や兜虫 荒井民子

【選評】

戦争を憎し憎しとなめくじら

戦争の絶える事なき地球。現在も理不尽な戦闘が連日報道されています。しかし、実際私たちにはどうすることもできない。そのもどかしさを手も足も出ないなめくじらに託して表現していることに共感を覚えます。日本とて例外ではなく、戦争で多くの犠牲者を出しました。戦争反対はもちろんですが、「憎し憎し」と押し出すように心から出た言葉が、胸を打ちます。力はなくともゆっくりでも、戦争のなき世へと一步一步を進めて行かなければ……。

久根美和子選

特選

夏炉端熊の毛皮をどさと置く 黒沢孝子

入選

星雲に淵あり古代蓮ひらく 仲 寒蟬

満席と断られたり天の川 鈴木臣和
佳作

競り声の飛び交ふ木場や木曾晩夏 小澤準一
心太作為なきまま押し出され 伊藤みち子

水出しの茶の甘き日や稲に花 伊藤美恵
 風呂敷にみんな包みて生身魂 長崎玲子
 打坐道元朝顔の蔓巻きつきし 宮坂静生
 山頂に寝て銀漢をふりかぶり 宮坂 碧
 蜘蛛の囀の月を捕へて光りだす 西村はる美
 神輿捲りや木曾の晩夏を真二つ 小澤準一
 父と子の密なる時や兜虫 荒井民子
 檸檬手に紡錘形のふと不安 酒井和子

【選評】

夏炉端熊の毛皮をどさと置く
 勦々とした熊の毛皮の重量感の伝わる下五音。炉火に照らされ、艶やかな毛並はまるで生きているかのよう。やがて、主の手柄話なども始まり、登山客との語らいの中でふけてゆく山小屋の景が、様々浮かぶ句。

星雲に淵あり古代蓮ひらく
 一読、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』を彷彿とさせられた句。星雲の淵に咲く古代蓮という措辞に、銀河への悠久のロマンが漂う。

満席と断られたり天の川

この夏は、熱中症やコロナ感染で多くの方が亡くなられた。黄泉が満杯で断られ、三途の川を渡らずに済んだ作者。少しおかしみの後、しみじみとさせられる。

古畑 和選

特選

瞬くは楸邨・兜太星今宵 西村はる美
 入選

坊主頭小突きつ葱の種吐かす 上原富子
 檸檬手に紡錘形のふと不安 酒井和子
 佳作

四楽章マーラー五番春きざす 本多独川
 みんみの一山揺する朝かな 本田幸達
 殉教者の衣のごとき蟬の殻 岩井かりん
 夏座敷ははの手擦れの鯨尺 松下勝昭
 半夏生ゴルゴンゾーラ見て飽かず 一志貴美子
 藤椅子や雨ざつと来てふつと行き 辰野利彦
 日の盛風無き午後の鎌を研ぐ 荻上憲治
 山頂に寝て銀漢をふりかぶり 宮坂 碧
 神輿捲りや木曾の晩夏を真二つ 小澤準一
 みちのくの訛なつかしきくらんぼ 篠田洋子

【選評】

特選句は楸邨と兜太の俳句で偉大な俳人に相応しい俳句です。空に輝く星の中でひときわ輝く星をお二人に例えた所が文句なしの俳句と思います。

入選一句目は葱の種を採る様子をユーモラスに表現している点が素晴らしいです。

入選二句目は作者の不安定な心の内が良く出ていると思います。レモンと紡錘形のコラボがとても良いです。

佳作の「夏座敷」、「藤椅子」、「日の盛」はどれも郷愁を誘う俳句で共感しました。一句目のマーラーの俳句もスケールが大きくて良いと思います。

青木澄江選

特選

麦の秋ただ平安を願いたり 奈都薫子
 入選

夏座敷ははの手擦れの鯨尺 松下勝昭
 蜘蛛の囀の月を捕へて光りだす 西村はる美
 佳作

反戦に無力ぞ紙魚を払ひつつ 国見敏子
 種袋花のつぶやき聞こえたり 齋藤文十郎
 夕星や天地返し 黒沢孝子
 夕涼み二度と逢えない人を待ち 平林木子
 浅間嶺の入道雲の力瘤 荒井民子
 三伏や生者のためのレクイエム 高橋佳世子
 使い捨てし縄とぐる巻く残暑かな 山本佑子
 雲が雲高く押し上ぐ炎暑かな 島田洋子
 法師蟬ぐるりと畑を電気柵 比田井喜美子
 満席と断られたり天の川 鈴木臣和

【選評】

〈麦の秋〉今、ウクライナを気に掛けない人はいないだろう。欧州のパンかごと言われる小麦の一大産地。その国旗は麦畑と空の色を表している。目の前の黄金に輝く麦畑、侵



攻がなければ今頃ウクライナにもこんな光景が地平線まで広がっていただろう。侵攻、ロシア、ウクライナ、これらの言葉は一切使われていないが充分伝わる。静かな句の強さ。

〔夏座敷〕私が子供の頃、家で和裁の仕事をする人が偶に居た。母上もそんな一人だったのだろう。手擦れの鯨尺に当時の母の姿がありありと蘇る。

〔蜘蛛の囿〕蜘蛛の囿は月光に照らされ光るのではなく、昆虫を捕えるように月を捕えたから光る、という発想がとてもユニーク。

西村はる美選

特選

坊主頭小突きつ葱の種吐かす 上原富子

入選

反戦に無力ぞ紙魚を払ひつつ 国見敏子

三伏や生者のためのレクイエム 高橋佳世子

佳作

みんみんの一山揺する朝かな 本田幸達

あしたには治る擦傷青蜜柑 久根美和子

諏訪盆地暮色の芯にヨットの帆 根橋久子

夕星や天地返し 葉涼し 黒沢孝子

熱風を一太刀にする女子剣士 中村和代

標本の鮫の顎骨土用干 篠遠良子

神輿捲りや木曾の晩夏を真二つ 小澤準一

後鳥羽院遠忌や隠岐の草蜚 中澤康人

不器用な蚯蚓地表に蜿きをり 荻原昭廣
夕焼や猫の陣取る風の道 宮澤繁子

【選評】

坊主頭小突きつ葱の種吐かす

まるで子を育てるかのように愛情深く野菜作りをされておられる作者の優しく実直なお人柄が伝わってくる一句。来期用の種を葱坊主より採取する様子がウイットに富んだ言葉で表現され、思わず読む者の笑みを誘う。

反戦に無力ぞ紙魚を払ひつつ

戦争を知らない若者層が増す日本に居てのウクライナでの武力闘争の映像は、衝撃以外の何物でもなかった。遠くにいて何も出来ない心許なさを素直に詠まれている。

三伏や生者のためのレクイエム

夏の暑さの代名詞のような「三伏」の季語。年々の異常気象を思う時「生者のためのレクイエム」の措辞には大いに納得させられた。

応募数七十四名、一四八句。

特選3点、入選2点、佳作1点で集計。

選者特選句および高点句について、それぞれ賞品を呈上いたします。表彰については吟行会の席上を予定しておりますが、吟行会が中止となりましたため、受賞各位宛に発送させていただきます。

なお、結果発表について諸事情により十月にずれ込んだことを深くお詫びいたします。

紙上句会担当 事務局

一句高点

1位 11点

檸檬手に紡錘形のふと不安 酒井和子

2位 8点

星雲に淵あり古代蓮ひらく 仲 寒蟬

満席と断られたり天の川 鈴木臣和

3位 7点

風呂敷にみんな包みて生身魂 長崎玲子

蜘蛛の囿の月を捕へて光りだす 西村はる美

4位 6点

反戦に無力ぞ紙魚を払ひつつ 国見敏子

星走る真夜白魚の生まれけり 齋藤文十郎

夏炉端熊の毛皮をどさと置く 黒沢孝子

▼会費納入について

本年度地区協会費（一、〇〇〇円）を未納の方には振替用紙を同封しました。速やかにお払込みください。

応募作品一人一句

(到着順)

レントゲン車停まる片蔭なかりけり 上原 富子
 葉隠れの梅の実迷ひるることし 太田 継子
 ああダムよ鮭の戻れぬ千曲川 阿部 仲童子
 水盗むことまで教へねばならず 国見 敏子
 四葉章マラー五番春きざす 本多 独川
 しなやかに生きていきまし更衣 川久 保京子
 蟬ごゑの昂りひとに運不運 辰野 利彦
 生きているだけで奇跡や蛇苺 小澤 溪
 万緑や卒寿はそこに胸張りぬ 塩澤 やとし
 久々に友集りぬ木木芽吹く 熊井 みつ子
 眠とは白夜の日々のごときもの 西澤 日出樹
 みんみんの一山揺する朝かな 本田 幸達
 あしたには治る擦傷青蜜柑 久根 美和子
 山と山架く木曾谷の揚花火 窪田 英治
 遠く来てまた遠く見る苔の花 伊藤 翠
 一瞬後何が起るか五月闇 三石 なるみ
 種袋花のつぶやき聞こえたり 齋藤 文十郎
 露の世に絶えぬ戦や天の川 荻上 憲治
 木苺や我人生のごつごつと 比田 井喜美子
 諏訪盆地暮色のせにヨットの帆 根橋 久子
 ミンミンゼミ読経追ひかけ多重奏 富岡 詔子
 夕星や天地返しの葉涼し 黒沢 孝子
 宴たけなはではございませが二重虹 仲 寒蟬
 瞬くは楸邨・兜太星今宵 西村 はる美
 天平の雕やの矢羽や避暑期来る 五味 真穂
 酌むならば不老の酒を暑氣払 宮坂 碧

玉葱の剥かれて光る玉の肌 古畑 和
 競り声の飛び交ふ木場や木曾晩夏 小澤 準一
 薔薇の香を吸ふて出掛ける投票所 樋上 照男
 自爾なお蜂に刺されてしまいきり 高山 ゆう子
 蟹釣やテトラポッドに根比べ 加藤 律子
 大書する背のうねりに海暑かな 長島 環
 木曾馬の母情は篤し独活の花 大野 今朝子
 山百合の斑点赤し小雨くる 宮坂 秋湖
 熱風を一太刀にする女子剣士 中村 和代
 穏やかな笑みをこぼして夏の月 清水 恵子
 己の意志確と八月十五日 関 道子
 鳥になる夢から目覚め梅雨明け 新村 洋子
 向日葵や卑弥呼の息吹収まらず 中澤 康人
 殉教者の衣のごとき蟬の殻 岩井 かりん
 うつせみの綵身の泥乾きけり 小伊藤 美保子
 満たされぬ心抱きしめ大西日 奈都 薫子
 八月の裸婦画の声や無言館 竹野 入美奈子
 夏座敷ははの手擦れの鯨尺 松下 勝昭
 巫女舞の果てて涼しき神楽殿 篠遠 良子
 葭切の羽搏きに音無かりけり 原田 宏子
 本題を遠巻にしてかき水 依田 ひろ
 叩かれてばかりの西瓜爆発す 佐藤 文子
 心太作為なきまま押し出され 伊藤 みち子
 夕涼み二度と逢えない人を待ち 平林 木子
 先月のカレンダーのまま青簾 平林 良
 侵攻に地球騒然朱夏の月 篠田 洋子
 物置に伏せあるギター秋の虹 吉池 史江
 やるせなき恋に終止符毛虫焼く 小澤 斉子
 浅間嶺の入道雲の力瘤 荒井 民子

空蟬やすでに己の墓標なる 荻原 昭廣
 芝を刈る火花散る度脚竦む 宮坂 市子
 道をしへ岐路にて急所見逃さず 平澤 寿美枝
 水出しの茶の甘き日や稲に花 伊藤 美恵
 夏空をゆるり旋回グライダー 宮澤 繁子
 みそかごと来世へからすうりの花 高橋 佳世子
 炎天を死刑執行報走る 小林 貴子
 戦争をごつこに止むる草矢かな 鈴木 臣和
 百合挿頭しシュプレヒコール独り言つ 一志 貴美子
 松本ぼんぼん遅れてもついて行く 長崎 玲子
 使い捨てし縄とぐる巻く残暑かな 山本 佑子
 打坐道元朝顔の蔓巻きつきし 宮坂 静生
 緑蔭に休める山羊の悟り顔 上村 敦子
 車撫ぜ免許返上涼しかり 下田 幼和
 夏草に挑む軍手や頼もしき 島田 洋子
 扇風機に当たり続けて老けにけり 酒井 和子
 歩まねば疼く体や雲の峰 堤 保徳
 世を隔て葭切の啼く沼の縁 城取 信平
 死は一瞬その後の長きこの夏は 柳澤 和子



会報 第100号
 令和4年10月15日発行
甲信地区現代俳句協会
 発行人 佐藤 文子
 編集人 窪田 英治
 事務局 〒389-0406
 東御市八重原900-1
 TEL (0268) 67-3364
 00520-0-34872
 甲信地区現代俳句協会
 郵便振替 口座
 印刷所 双葉印刷有限公司